

医療的ケアに対する教員の不安感と思い

○齊藤有香

(北海道教育大学大学院教育学研究科)

安井友康

(北海道教育大学札幌校)

KEY WORDS: 医療的ケア 不安感 重度重複障害

【目的】

近年、医療や医療技術の進歩により、障害が重くても医療や福祉の支援を受けながら自宅や地域で生活していけるような体制が整いつつある。特別支援学校でも濃厚な医療的ケアを要する児童生徒が通学するようになり、教員も一定の条件の下で医療的ケアの一端を担うようになった。平成28年度の文部科学省の調査によると、全国の公立特別支援学校において、認定特定行為業務従事者として医療的ケアを行っている教員は4,196名という結果が出ており、年々増加傾向にある。

教育を専門とする教員が医療の一部を行うことに、教員自身も戸惑いや不安、責任の重さを感じていることが予想される。そこで本研究では、教員がもつ医療的ケアへの不安感や思いを探ることを目的とした。

【方法】

1. 研究対象：本研究は医療的ケアを行っている教員3名を対象とした。対象者は医療的ケア児に関わってそれぞれ1年目、5年目、11年目であった。
2. 質問項目：(1)基本情報、(2)医療的ケア実施の際に心にかけていること、(3)医療的ケアの不安な点・有用だと感じる点、(4)医療的ケアに対する現在までの心境の変化、(5)必要としている支援や情報とした。
3. 研究方法：半構造化面接を用いてインタビュー調査を行った。対象者には自由意思での参加である旨を口頭で説明した。同意を得た対象者に対してICレコーダーで内容を録音し、逐語録に起して分析した。

【結果】

分析の結果、106のエピソードを抽出した。さらにそれらを、5つの大カテゴリー、11の中カテゴリー、31の小カテゴリーに分類した。表は大カテゴリー、中カテゴリーを示したものである。以下中カテゴリーの「医療的ケアへの不安」には、「実施手順に間違いがないかの不安」「実施時にミスをするかもしれないという不安」「漠然とした不安」「責任の重さに対する不安」「子どもの状態の変化に関しての不安」の小カテゴリーが分類された。「改善したい点」には、「授業の中断につながる」「医療的ケアを実施できる人が少ない」「医療的ケア実施時の雰囲気作り方」「看護師に代わりにやってほしい」の小カテゴリーが分類された。「不安の軽減」には、「経験を積むことによる自信」「看護師や保護者が近くにいるという安心感」「知識をもっている安心感」「法律で定められていること」「医療的ケアができればと思う場面があった」の小カテゴリーが分類された。「医療的ケアの有用な点」には、「子どもが苦しい場面ですぐに対応できる」「子どもの体の状態についての理解が深まる」の小カテゴリーが分類された。「子どもへの声かけ」には、「他の子どもと同じような声かけを心がける」「医療的ケアの内容を説明しながら行う」の小カテゴリーが分類された。「信頼関係の構築」には、「子どもとの信頼関係を大切にする」「子どもが反応を示してくれる」の小カテゴリーが分類された。「看護師とのつながり」には、「医療的ケアの指導や相談にのってもらう」「教員ができない部分のケアへの対応」の小カテゴリーが分類された。「保護者とのつな

がり」には、「家や学校の様子を共有し合う」「子どものことを知ってほしいという親の思い」の小カテゴリーが分類された。「周囲との連携」には、「教員同士でフォローや相談をし合う」「養護教諭が看護師とのパイプ役になっている」「多職種と連携する難しさ」の小カテゴリーが分類された。「研修段階に必要な情報」では、「医療的ケアに関する知識」「実技場面」「教員が医療的ケアを行う意味」の小カテゴリーが分類された。「実施段階で必要な支援」では、「医療的ケアの情報を共有してくれる人」の小カテゴリーが分類された。

表 医療的ケアに対する思いのカテゴリー分類

大カテゴリー	中カテゴリー
医療的ケアの不安について	医療的ケアへの不安
	改善したい点
	不安の軽減
医療的ケアの有用な点	医療的ケアの有用な点
医療的ケア実施時の対応	子どもへの声かけ
	信頼関係の構築
多職種とのつながり	看護師とのつながり
	保護者とのつながり
	周囲との連携
必要な情報・支援	研修段階で必要な情報
	実施段階で必要な情報

【考察】

1. 医療的ケアに対する不安感の所在：医療的ケアを実施する教員にとって一番の大きな不安は、実施の手順やミスに対するものである。教員であっても医療的ケアを行う以上は、常に完璧さを求められる。「少しのミスから子どもが苦しい思いをしたらどうしよう」という不安を持ちながら、医療的ケアに向かっていた。また、医療的ケアを行うことで授業の中断につながることも気にかかる点であった。医療的ケアを実施できる教員自体が少ないことも、学校現場でケアを円滑に進めるための障害となり得ると考えられた。

一方で不安感が軽減していく要因に、医療的ケアの経験の積み重ねが必要であることが示唆された。また、看護師や保護者との連携がしっかりと取れていればそれ自体が安心感につながる様子が伺われた。周囲の支えや励まし、教員同士のフォローによって教員の負担感が軽くなると考えられた。

2. 必要な支援について：教員は医療的ケアの研修の際になぜ教員が行うのかといった教育側の視点から見た情報を必要としていた。医療的ケア実施場面では、医療的ケアに関する情報を共有できる教員がいてほしいと感じていた。教育的立場としての医療的ケアについて他者と共有できるような場が増えれば、ケアの不安感の軽減や、積極的な価値付けができるという可能性のあることが推察された。ケア実施者だけではなく、学校全体で医療的ケアに関する知識を共有することが、教員の心強さに繋がると考えられた。(SAITO Yuka, YASUI Tomoyasu)